

算数と数学を分ける境界として、従来は加減乗除の四則計算、正の有理数の範囲を出ずといった暗黙の設定があたかも自然法・慣習法であるかのごとくなされていた。現在でもこのことは基本的には遵守されていると思われるが、近年これに対し異変の兆候がみられるようになった。すなわち、中学入試算数(特殊算数)への高等数学の浸透である。具体的に挙げれば、積分法、漸化式、行列、不定方程式、行列式、集合論、フラクタル等である。算数のコンテキストの中ではこうした題材の思考法のみが強調され、抽象概念は極力排除されている。この数学の算数への浸透は、教育的見地から算数はあくまで数学の準備段階であるという認識と、より根源的には算数と数学の本質的同質性があるということなのではないだろうか。